

男声合唱曲「出発」山崎佳代子作詩、松下耕作曲を合唱するに際し思うこと

2024年11月5日

男声合唱団 阪南メンネルコール

江川 猛

作曲家の松下耕さんは、元々この曲は、女声合唱とピアノのための「薔薇、見知らぬ国」の最終曲として作曲したものを男声版にしたと述べている。新しい時代、新しい生き方への「出発」への序章となるか。私たち自身の智慧の度合いに委ねられていると思わざるを得ないと結んでいる。

この曲が生まれた背景を知り、この曲の意味するところを知りたいと思い、調べてみる。

作詩された山崎佳代子さんは、セルビアに長年住み、日本語とセルビア語で創作する詩人である。

山崎佳代子さんは、1999年、NATO軍の空爆があったときからそこに生きる人々とともに、ベオグラード（セルビアの首都）に残り、詩を書き続けたとある。

詩集「薔薇。見知らぬ国」は、旧ユーゴスラビアの崩壊の悲劇を現地で体験した詩人山崎佳代子さんが、旧ユーゴスラビアの内戦をモチーフにした詩集である。

第2次世界大戦後、東ヨーロッパには社会主義国が生まれ、体制への不満や民族間の紛争から内戦が起きた国もあった。旧ユーゴスラビア連邦は、指導者チトーの下で、多数の民族や共和国、宗教が共存する国家が成立した。6つの共和国（クロアチア、スロベニア、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、モンテネグロ、マケドニア）から構成され、5つの民族、3つの宗教、4つの言語を持つ多民族国家であった。

1980年にチトー大統領が死去すると、民族間の対立が表面化し、1991年にスロベニアとクロアチアが独立を宣言したことをきっかけに内戦が始まった。1992年にボスニア・ヘルツェゴビナが独立し、旧ユーゴスラビア連邦は崩壊する。民族間の対立で起きたボスニア紛争や、セルビア共和国から独立を目指すコソボ自治州のアルバニア住民を政府軍が弾圧するなど紛争が激化したため、NATO軍が空爆を開始、80万人が難民となる被害が出た。10年を超える戦争は2000年頃から収まり、旧ユーゴスラビアは、6つの国に分かれた。

詩集「薔薇、見知らぬ国」の解説には、次のように書かれている。

ある日…次の日、そしてまた次の日、闇の中で目を見開いていた私の前に光の朝空がひろがるはずだった。しかし、来る日ごと、空は黒い怪鳥たちにおおわれる。空爆下のベオグラード。希望と絶望、そして多くの隣人たち、子供たち。祈りのきわみに、なお紡がれる言葉の雫たち。

詩集は、緑の朝を書き出しに22篇の詩からなり、出発は最終篇の詩である。

女声合唱とピアノのための組曲「薔薇、見知らぬ国」には、このうち5篇が選曲され、最終曲が「出発」である。

「出発」は、背景を考えると非常に重く、深い歌詞であり、コラール風（歌いやすい賛美歌の意味）の鎮魂歌でありながら、未来への一筋の希望が込められた美しい楽曲と紹介されている。

これらの背景から「出発」の歌詞を紐解いてみる。

まだ見も知らぬ 海の広さへ・・・ 広大で穏やかな広い広い海、まだ見たこともない海は見知らぬ国、そこは
未来の平和で希望のあふれる国を思わせる

それでも、川は流れて・・・ 希望溢れる未来の平和な国につながる道が続いていく。

君の歌は、終わることを知らず・・・ 歌は願い、決して希望をなくさない。歌い続けて行こう

だから僕たちは、こうして冷たい手をかざし、柔らかな火を囲み、朝を迎える・・・ 今日また、闇の中で目
を覚まし、暖を取る火に手をかざし、生きていることを実感し、希望の朝を迎える

向こう岸に、豎琴が鳴るのを聞いた・・・ 仲間が集っている。いよいよ出発する合図を聞いた。

やがて空はあざやかに広がり始め 僕らの旅は始まる・・・ 朝の光が輝き始めた。さあ僕たちも出発だ。戦争
のない平和な世界へ。

以上文責 江川猛